

甲状腺外科草子 3

戦場の外科医たち 2

杉野 圭三

中世、ギリシア、ローマの医学はアラビヤへと伝わり、新しい薬（カンフル、ジャコウ、センナなど）の使用、脈や尿の検査が重視され、アビケンナ(980-1037)は医学典範(医学の正典)を著しました。医学の進展はこの後、サレルノ医学校、ボローニア大学、パドヴァ大学など次世代へ続きます。

中国での医学の始まりは神農（本草経、BC2800 頃）の頃からと伝えられ、黄帝（内経、BC2600 頃）、張仲景(傷寒論、AD15—219 頃)へと発展しました。



神農 (BC2800 頃)



アビケンナ(980-1037)

中学生の頃、三国志（吉川英治作）を夢中で読んだものです。この中で伝説の名医華陀が登場します。華陀は英雄関羽（160—220）の毒矢で受けた肘の骨を無麻酔で削り、関羽は酒を飲み、碁を打ちながら平然と手術を受けたとされています。史実と異なる作話でしょうが、壊死組織を搔把・切除することは理にかなった手術です。



華陀 (?—208)



関羽 (歌川国芳)

日本における古事記に記された大国主命が因幡の白兔を治療する話（諸説解釈あり）は、古代医療の原点となる伝承です。

広島大学第二外科教室のシンボルマークは、この伝説から生まれました。「頭の天辺から足先まで全てを診る外科」を標榜し、脳神経、甲状腺・乳腺・内分泌、呼吸器、食道・胃・大腸、肝胆膵、血管、移植などを担当する古き、良き大外科講座でした。



広島大学第二外科のシンボルマーク：
大国主命と因幡の白兔

日本の戦国時代では、僧侶や武士の一部などが戦いの刀傷の治療を受け持ち、金瘡醫と呼ばれるようになりました。金瘡（創）之書全部（1657）によれば当時の止血法として各種漢方薬、民間療法（足毛馬ノ尿ヲ以て同馬ノクソヲ十度斗シメホシシテ黒焼ニシ付ケル：いやはや何とも！！）、焼灼などが記されています。馬の糞は勘弁していただき、せめて信玄や謙信の隠し湯で湯治をさせてもらいたいものです。



戦陣金瘡治療（8-Wisdom より）

参考文献：

小川鼎三、医学の歴史（中公新書）

阿知波五郎、わが国医学に及ぼしたヨーロッパ医学の影響（2）。

日本医学史雑誌 12:2-53,1965.

アルバート・S・ライオンズ、R・ジョゼフ・ペトルセリ。図説医学の歴史、1978.

佐野 晃夫：8-Wisdom

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2021年10月19日